

次世紀に向けた社会基盤

副会長 末松 安晴



科学技術の発展にはさまざまな社会的背景があろう。自然界の複雑な事象をいくつかの限定された集団に分け、そうして形成された単純なサブセットを理想化し、そうしたサブセットについて実験に合致する一般解を構築し、こうしたいくつかのサブセットを集合して複雑な全体を系統的に理解しようとするのが科学の論理であろう。

科学が発達した西欧では、畑作農業の帰結として人口密度過疎の社会を構成した。こうした人間間のかかわりの少ない社会の論理は、個人的な振舞い、すなわち個人の論理が優先する。また、社会が一神教を尊奉して精神活動を深め、唯一の系統的な考え方への努力が払われている。そうした環境を背景にして、西欧では科学の発達に必要な論理の単純化や理想化が思考されやすい。しかし、科学の創設には有利であるが、社会の円滑な運営努力が希薄となり、馴染まない新しい価値観の導入には抵抗がある。

東洋では水田農耕の帰結として人口密度が過密である。こうした社会では、水利の確保に必要な広域社会の連携や人間同士の相互関係無視では、社会をとらえることができない。そして、個人的な振舞いよりも安定な社会への論理が発達し、複雑な社会を成り立たせるために、取り合えず特殊解を得るのが必要であった。しかし、このような社会背景は、直接役に立つ技術の発展を助けてきたが、科学を発達させることには失敗した。我が国では、個人の自制を基礎にした社会倫理を定着させ、八百万の神を戴く多神教の風土から、多用な価値観の並存を許し、新しい価値観の導入には抵抗が少ない。

21世紀では、地球は過密化し、世界の連携が密となって多様な価値観の許容に向けて柔軟な対応が迫られる。次世紀の社会の発展のためには、健全な社会論理と科学技術の発達とが両輪のごとくに必要とされる。東西両文明が融合した社会の形成が待たれるのであるが、科学的思考を取り入れることより、社会習慣を変える方がより困難である。こうした観点に立てば、次世紀の地球の発展に果たす我が国の役割が国際的に極めて大きいように思われるのですがいかがでしょうか。